

第2回

18世紀のアジア

監修・講師 佐伯英志

学習のねらい

18世紀のアジア諸国はどのような国際関係を築いていったのだろうか。私たちに身近な物を題材にして問いを立て、東アジア、アジア全体、アジアとヨーロッパとのつながりへと視野を広げていき、18世紀のアジアの国際関係を多面的・多角的に考察し、表現する学習を通じて、18世紀のアジアの経済と社会、および「近代化」について学ぶ。

keyword

●18世紀の東アジア

貿易／清／「鎖国」／長崎／銀

●結びつくアジア諸地域

華僑・華人／アユタヤ朝／ムガル帝国／オスマン帝国／ムスリム商人

●18世紀のヨーロッパとアジア

茶／砂糖／綿織物／陶磁器／奴隷／三角貿易

18世紀の東アジア

18世紀の東アジアでは、限定されてはいたが、それぞれの国どうしがさまざまな形で結びついていた。東アジアで最も強大な国である中国（清）は、伝統的な華夷秩序を意識し、原則として周辺諸国からの朝貢にともなう貿易のみを認めていた。しかし、日本や東南アジア島しょ部、ヨーロッパ勢力とは、そのような朝貢関係にとらわれずに限定的な貿易を行っていた（互市）。また、江戸時代の日本は、キリスト教の禁止などを目的として「鎖国」とよばれる制限外交をしており、長崎で中国とオランダ、対馬で朝鮮、薩摩で琉球、松前で蝦夷地のアイヌの人々と、それぞれ交易を行っていた。長崎での中国との貿易では、生糸や絹織物などを輸入し、日本からは世界有数の産出量を誇っていた銀などを輸出していた。しかし、17世紀後半以降、産出量の減少にともない、金銀の流出を防ぐために貿易額を制限し、代わりに銅や海産物などを輸出するようになった。

結びつくアジア諸地域

18世紀には、中国（清）の海禁解除などによって、東アジアと東南アジアの交易が活発に行われた。中国の生糸・陶磁器・茶、東南アジアの米・香辛料・錫、日本の銀や銅など、さまざまな物が流通した。中国では、経済発展とともに人口が増大し、国内の移住だけでなく、海

このページ掲載の文章・画像の無断転載を固く禁じます。

外へ移住する商人や労働者もあらわれた。そのため、東南アジアをはじめ、各地に華僑・華人社会が形成され、チャイナタウンがつけられた。東南アジアのアユタヤ朝は中継貿易で栄えたが、やがて滅亡し、その後ラタナコーシン朝が開かれた。南アジアではイスラーム王朝であるムガル帝国が栄え、インド・イスラーム文化が花開いた。インド産の更紗やキャラコなどの綿織物が輸出され、ヨーロッパから日本まで広く流通した。西アジアでもオスマン帝国が繁栄し、アジアの交易圏にヨーロッパ諸国も参入すると、ムスリム商人などによって、アジアどうしのさまざまな交流が行われ、結びつきを強めた。

18世紀のヨーロッパとアジア

18世紀頃、ヨーロッパ諸国で経済が発展すると、上流階級を中心にさまざまなしこう品が消費されるようになった。中国の茶、東南アジアのコーヒーや砂糖、インドの綿布などがヨーロッパにもたらされ、人々の生活に定着していった。貿易の拡大とともに、中国と日本の陶磁器や漆器、インドや東南アジアの綿織物などの輸入も増加した。ヨーロッパとアジアの結びつきが強まるいっぽうで、ヨーロッパとアフリカやアメリカ大陸との新しい経済関係も成立した。特にイギリス・フランスは、西アフリカへ武器などを輸出し、その対価として得た黒人奴隷をカリブ海域に輸出し、さらにカリブ海域で得た砂糖・タバコ・綿花などをヨーロッパに持ち帰った。このような貿易を大西洋三角貿易とよぶ。この結果、西アフリカでは大量の人口流出により伝統社会が破壊され、カリブ海域ではプランテーション経営が広がり、モノカルチャー化が進んだ。ヨーロッパを軸としてアジアから大西洋地域までが結びつき、世界の経済的な一体化が進んだ。

“探究”してみよう！

- 日本は「鎖国」を「していた」という意見と、「していなかった」という意見がある。それぞれ、どのような立場でどのような解釈から言われているのだろうか。調べてまとめてみよう。
- なぜイギリスで、砂糖入り紅茶を飲む習慣が普及したのだろうか。国際的・社会的な背景から考察してみよう
- 18世紀のアジアの国際関係について学び、現代にも影響を及ぼしていると感じたことはないだろうか。現代的な諸課題と「近代化」の歴史を結びつけて考察し、表現してみよう。